

琵琶湖北湖（彦根市地先）における刺網でのオオクチバス蝟集状況調査

田口貴史・石崎大介・岡本晴夫

1. 目的

琵琶湖北湖（彦根市地先）でのオオクチバス（以下、バス）の効率的駆除を目的として、季節的な蝟集状況を刺網により調査した。

2. 方法

蝟集が想定される多景島（水深 5～8m の岩礁帯）、八坂沖魚礁（水深約 11m）、水産試験場港湾周辺（以下、港湾周辺、水深 2～3m）にて 6～9 月までの毎月と 12 月に刺網での捕獲調査を実施した。調査には内網目 60 mm、外網目 300 mm の三枚網 2 把を用い、各所に一昼夜、底刺網で設置した。捕獲結果より CPUE（刺網 1 把あたりの捕獲尾数）と混獲率（総捕獲尾数に対するバス以外の魚類の尾数割合）を算出した。また環境条件として水深 10 cm ごとの鉛直水温を記録した。

3. 結果

バス捕獲状況は地点ごとに異なった（図 1）。多景島では、6～7 月にかけて CPUE が高い傾向にあったが、8 月以降に低下した。この要因としては 8 月に生じた水温躍層の消失に伴う、バスの行動範囲の拡大が考えられる。6～7 月には鉛直水温データで水深 7m 前後に急激な水温変化が確認されたが（図 2）、以後はそれが消失した。躍層が形成され、バスの行動範囲が狭まる時期の駆除が、琵琶湖北湖の沖合（島周り）では効果的かもしれない。

一方、八坂沖魚礁では 9 月まで捕獲魚のほとんどが在来魚類であったが、12 月にはバスの捕獲数が急増したことから、沖の魚礁はバスの冬季蝟集場所になる可能性が考えられる。

港湾についてはバスは捕獲されるものの、調査期間を通して混獲率が高い傾向にあり、刺網以外の手法の検討が必要である。

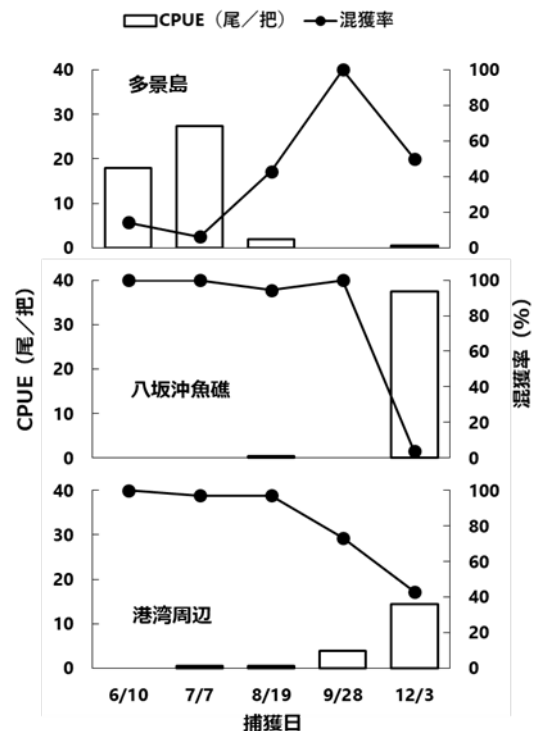


図 1 地点別のオオクチバス捕獲状況と混獲率の経時変化

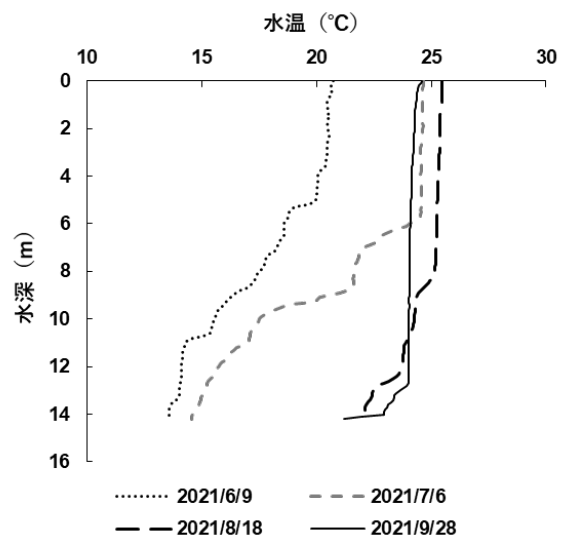


図 2 多景島沿岸での鉛直水温の経時変化

本研究は水産庁からの委託事業「効果的な外来魚等抑制管理技術開発事業」の一部として実施した。